四天王寺高等学校

入学試験問題

国語

平成24年度

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

情報社会は情報の処理と効率的適用には優れていますが、反面、言語感覚や語彙（ごい）は細ってきているようにみえます。異なるはずの感覚や感情や物事への印象を適当に一つの言葉で表現する。言語感覚は大ざっぱになってきています。こういう語彙や言語感覚の変化は、言葉以外の情報がたくさん登場し、言葉に頼らなくてもすむ、と思ってしまえる状況があるからかもしれません。

ケータイメールでは、写真などの画像、絵文字、メロディなどもやりとりされる。なかには絵文字一個のメールというものもある。①この「豊かさ」が語彙を奪うと同時に、言語感覚を貧しくさせているともいえます。

あるコーヒーのＣＭで、二人の男性が夜空の星を見ているシーンがありました。傍（かたわ）らの男性が隣の男性にこういいます。

「〇〇さんっていい人だなあ」

すると隣の男性はこう聞き返します。

「どこが？」

一瞬にしてクウキが変わったような気がしました。

②この「どこが？」は私にはとても批評的に感じられたのです。

だれかが「かわいい」といったとします。隣のだれかが「どこが？」と聞き返す。

「むかつく」「どこが？」でもおなじです。どちらも日常ではほとんど耳にしない会話ではないでしょうか？　ことに若い世代ではそうです。「どこがかわいいか分からない」ときにも「どこが？」とは聞き返さない。③そうした会話はたがいの理解をさまたげます。このＣＭはそんな日常風景を批評的にとらえて、あえて「どこが？」といったようでした。

私はケータイで絵文字をやりとりすること、あるいは「かわいい」というような、［Ⅰ］言葉のやりとりを否定しているわけではありません。絵文字でも、できあいの定型文でも通じあえばいいのではないかと思います。

ただそれは対話の停滞、思考の停止という危険をはらんでいるということなのです。言葉をできるだけ［Ⅱ］伝えあうという姿勢が、現代社会から失われつつあるのではないかと危惧（きぐ）するわけです。

そして、人と人との対話を封じこめる最強の言葉が「④クウキを読め」なのだと思います。

ケータイやネットが日常化した情報時代になって、言葉にたいする私たちの態度も変化しました。言葉をコミュニケーションのたんなる道具とみなす傾向が、強まっているようです。けれど言葉は、金槌（かなづち）や鍋（なべ）のような形のある具体的な道具ではない。そのことを忘れて、いとも簡単に操れるかのように誤解しては危険です。

当たり前のことですが、言葉は⑤意図せぬかたちで相手に伝わったり、あるいはブーメランのようにもどってきて、自分を傷つけたりもします。

また言葉は口に出したとたんに相手、あるいは自分の気持ちを変えることもあります。

たとえば葬儀に際して弔辞を読む。あらかじめ原稿を用意するとき、故人への思いを言葉に書き連ねていく。そのとき、どんな言葉が故人を見送るのにふさわしいか、どんな弔辞にすれば恥ずかしくないか、などさまざまなことを考えて言葉にします。

そして、当日弔辞を読み始めたとたん、不意に涙があふれ読めなくなる。そういうことがあります。

平静に読み通すことができると思っていたのに、思わぬ感情のほとばしりに自分で驚くということがありますね。言葉は⑥他者へのメッセージを伝えるだけでなく、⑦自分の心や相手の心にも思わぬ作用をおよぼすのです。

会話だけでなく、文章を書くときもおなじです。言いかえたり、㋐ケズったり加えたりという文章の吟味と注推敲のプロセスを通して、言葉を連ねていくうちに、自分の考えがどこにあるのかつきとめられたり、自分の気持ちが整理されたりということもあります。言葉にすることで、自分でも意識していなかった怒りや哀しみが、突如こみあげてくることもあります。

「言葉は道具にすぎない」という誤解は、すでに自分の内面には常にはっきりとした感情や意思、知識が存在していて、それを井戸から水を汲みあげるように言葉という道具を使ってとりだし、相手に伝えることができるというシンプルな考え方から発生するのではないでしょうか。

また、身体的な表現能力が低下することで、誤解や㋑カン違いが生じやすくなることは充分に考えられます。なぜなら身体表現の乏しい「むきだしの」言葉は、さまざまに解釈され、誤解される可能性があるからです。

もしあなたが「あんたはバカだ」と、だれかを心配していったとします。その言葉は相手にどのように伝わるでしょうか？　一般的な語意そのままに受けとられ、相手を怒らせたり傷つけるか。それとも、心配のあまり出た、やさしい思いやりとして相手に伝わるか。

分岐点は、あなたと相手とのそれまでのかかわりかた、そして相手の感受力とともに、あなたの身体的な伝達能力にあると思います。表情や声の調子や仕草といった、言葉ではない身体的なメッセージもまた、スムーズな気持ちの伝達に力を発揮しているのです。

だから、身体表現の衰えによって相手にうまく伝わらない、また、相手の身体的なシグナルを感受しにくいということが、あるのかもしれません。

ただ最近、面と向かう対話でのこうした注齟齬が、増えているような気がします。ネットを介した言葉のやりとりが多くなり、身体的伝達力とその感受力がおろそかになっていることにも、その一因がある、と私には思えます。

ある夜、ジャズのライブで女性シンガーが面白いことをいいました。

彼女には中学生の息子がいます。親子関係は悪くはない。「ふつう」ということです。しかしその「ふつう」の親子関係でも、最近では息子が母親に平気で、「このタコ」などというそうです。

「早く食べて学校へ行きなさい」

などというと、きげんが悪いときは、

「うるさいな、タコ」と答える。

それでその母親はこう切り返すそうです。

「⑧ハーイ、タコでーすー♪」

シンガーですから、これをメロディにのせて歌うように答える。タコのように手足をくにゃくにゃさせながら。

これに対して息子は、ハーッと⑨ため息をつくも素直に食卓につくそうです。

平凡な親子の一風景のようですが、私は彼女のこの受け答えに感心しました。これ以上の回答はないような気がするのです。まず、「タコ」といわれた母親が「タコとはなんだ！」とはねつけず、「タコです」と相手の言葉を受け止めたという点。そして、字面にするとうまく伝わらないかもしれませんが、

身振りよろしく歌にのせて返したということ。

それによって母親自身が「タコ」という侮蔑の言葉を、心理的に体内で溶解させて受け止めることができる。息子は私たちが感じるほど、この言葉に憎悪をこめているわけではないでしょう。息子は自分の言葉がはねつけられなかったことで、⑩その棘に返り討ちをあびることはなかったと思います。

そんな感想を私はもちました。これは勝手な心理分析ですが、このやりとりがケータイメールでなされたら、こうはいかないでしょう。

この身体を動員した対話は電子ネットワーク上の文字情報の交換ではできないことです。

ネットワークは重宝な言葉のメディアです。それを否定することはできません。そのメディアはスピード感のあるやりとりや、不特定多数に情報を発信する能力ではすぐれています。

しかし、身体から発せられる言葉はネットにない豊かさをもっています。ことに人が人と対面し言葉を交わすとき、身振り手振り、声、表情、そして言葉を、もし情報量として㋐カンサンできたとすると、それはネットワークにはおよびもつかないものになるでしょう。

注　推敲＝文章の内容や表現などを、何度も練り直すこと。
齟齬＝くいちがい。

問一　――線㋐～㋒のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線①「この『豊かさ』が語彙を奪う」とはどういうことですか。文中から適当な部分を三十字以内で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

問三　――線②「この『どこが？』は私にはとても批評的に感じられたのです」とありますが、どういう視点からの批評ですか。「という視点」に続くように、文中から十字程度で抜き出しなさい。

問四　――線③「そうした会話はたがいの理解をさまたげます」とありますが、なぜそのように言っているのですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　話の腰を折られて、気分よく話すことができず、相手を嫌に思うようになるから。
イ　自分が言いたいことをなかなか分かってくれない人だと思い、いらだつから。
ウ　本当は相手と違うことを思っていても、その思いを伝えることができないから。
エ　相手に合わせるだけで、自分は本当はどう思っているのかを考えなくなるから。
オ　相手の真意を分かろうとしないし、自分の気持ちも伝えようとしないから。

問五　[Ⅰ]・[Ⅱ]に入る適当な語をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

Ⅰ　ア　素直な　イ　単純な　ウ　おさない　エ　あいまいな　オ　おだてるような
Ⅱ　ア　つくして　イ　長くして　ウ　省いて　エ　飾って　オ　選んで

問六　――線④「クウキを読め」は、どういう意味で使っていますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　相手の言うことに納得したうえで、同感を示せ。

イ　相手の言うことを理解したうえで、黙っている。
ウ　相手の言うことが分からなくても、静観する。
エ　相手の言うことに対して、自分の意見を言え。
オ　相手の言うことを認め、より良いものにする。

問七　――線⑤に「意図せぬかたちで相手に伝わ」るとありますが、同じ意味の語を、文中から漢字二字で抜き出しなさい。

問八　――線⑥「他者くのメッセージ」、――線⑦「自分の心」に「思わぬ作用をおよぼす」とは、葬儀の例では、どの内容に当たりますか。⑥は六字で、⑦は十五字以内でそれぞれ文中から抜き出しなさい。

問九　――線⑧「へーイ、タコでーすー♪」に、込められていないものは、どれですか。次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　タコだなんて嫌なことがあったのかしら。
イ　親に対してタコと言うとは侮辱だわ。
ウ　タコと言うなら、タコになりましょう。
エ　私はタコになったから、何もできないわ。
オ　タコは、うるさくなんかありません。

問十　――線⑨「ため息をつく」の「も」と同じ用法を次から一つ選び、記号で答えなさい。
ア　もう一つください。　　イ　これも読むといい。
ウ　教えてあげてもいいわ。　　エ　練習するも記録は伸びない。
オ　雨は降っても出かけます。

問十一　――線⑩「その様に返り討ちをあびる」と同じ内容の比喩表現を、文中から三十字以内で抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問十二　次のA～Eの五人は、本文を読んで話し合っています。筆者の考えに最も近いのは誰ですか。記号で答えなさい。
A　やはり、会話はリズムだわ。その場の雰囲気に合わせて、体を動かし、リズムに乗って楽しくしなくっちゃ。
B　そんなことを言っているのではないよ。自分の感情をコントロールしなければだめだと言っているのよ。怒りや不快感をそのままぶつけるのはいただけないよ。
C　そうかなあ。自分の気持ちを隠したり、偽ったりすることがいいとは思わないよ。筆者は、その伝え方を考えようと言っているんだ。「空気を読む」これが大事だ。
D　違うわ。「空気を読む」から思考が停止すると否定しているのよ。言葉は、道具なんだから、うまく使って、しっかり話し合うことが大切なのよ。
E　要するに伝達能力なのよ。思いを伝えるのは単に言葉の問題だけではないわ。言葉の受け止め方、相手との関わり方、いろんな事の総合体なのよ。

二　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

少年が好きな「中通り」に住んでいた小父さんは、父の親友である。少年の家にもよく遊びに来ていたのだが、ここ二年ぐらいは訪ねて来なくなっていた。そんな時、小父さんの引っ越し先に行くように父に言われ、少年は母と一緒に出かけた。挨拶が終わるやいなや、小母さんが泣き出したので、少年は小父さんに誘われ、海を見に出かけることになった。

急にながめが開けた。

引き汐どきの入り江には、砂浜がかなりひろがっていて、小さな漁船が幾艘も浜に乗り上げている。内海は㋐オダやかで、島影に島影が重なり、遠くの島はぼうと霞みながら空と溶け合っている。波は静かでも、寄せては返すたびに波打ち際に白いものが走って、少年には、それも生きている海の怖さとうつる。

浜くの下り口で曳網を㋑ツクロっている肌の灼けた老人が、和服姿の小父さんに気づくと、歯の抜けた口をもぐもぐさせながら言った。

「旦那さん。今日はずっと居なさるか。いや奥さんでもいい。あとで少し晩の魚を届けるから。」

「ありがとう。どっちかがいます。」

入り江に面した古い小さな神社の前まで来た。小高い所に社があって、松の木立に囲まれている。小父さんは石段を上りはじめた。半ばあたりでくるりと向きを変え、そのまま石段に腰を下ろした。少年にも腰を下ろすよう手ですすめた。

入り江がひと目で見渡せる。

波の音に、木立の風音が重なる。

a いつときして小父さんが口を切った。

「五年生だったね。」

「そうです。」

「今度一緒に釣りに行こう。船を仕立てるから。小父さんもこっち来て、釣りが出来るようになった。いい船頭さんがいるんだ。」

「僕にも釣れますか。」

「心配することはない。㋒人間社会と同じで、向こうからかかってくれるやさしい魚がいっぱいいる。」

初めて小父さんは声を出して笑った。

「海の風に吹かれて、海の上で食べる握り飯は本当にうまい。」

そうだろう、と少年は思った。

暖かな陽ざしの中で沈黙が続いた。

石段の入口にある石の鳥居にとまっていたカラスが、突然鳴きながら浜のほうへ飛び去った。

「お父さんは、元気か。」

さっきと同じことを、小父さんがまた尋ねる。

「はい。」

少年は、前の時よりも力をこめて答える。

「お父さんは、あんたを誇りにしている。よく勉強してな。いや、勉強なんてどうでもいい。一つだけでいいから、誰にも負けないものを身につけることだ。お父さんをがっかりさせるなよ。」

「はい。」

声が少し弱くなる。
「もうすぐ中学生だな。」
「はい。」
「戦争はじきに終わってしまう。あんなくだらないことは、早く終わらさんといかん。中学に入ったら、小父さんが注大連に連れて行ってやる。大連はいいぞ。大和ホテルに泊まって、馬車に乗って、小父さんがすっかり案内してやるから。」
小父さんは、僕に話しかけているのに、僕ではない誰かに話しかけているようでもある。何だか、自分と約束しているみたいだ、とも少年は思う。
相変わらず雲ひとつない②小春日である。
内海が、入り江の半分が、静かにきらめいている。
明るい空がたくさんある。
何が原因なのかは僕にはよく分からないけれど、小父さんは今、とても困っているらしいのに、そんなことは一切口にしない。恥ずかしそうでもないし、誰の悪口も言わない。言い訳もしない。ひょっとすると小父さんは、とび抜けて偉い人かもしれないし、その反対なのかもしれない。どっちにしても、そういう小父さんが僕には男らしく見える。でも、少しさびしい。
③少年は前えがたくなって、思わず、
「小父さん。」
と口にしてから、しまった、と思った。
「ん？」
という感じで少年のほうを向いた小父さんに、
「大連はそんなによかったですか。」
と聞き返した。ついさっきまで、思ってもいなかった言葉を口にしている自分に、少年はおどろいていた。
「本当の気持ちを言えば、日本に帰りたくないくらい大連が好きだった。しかしなあ、人間一人で生きているわけじゃあないから、好き勝手だけでは生きられないんだよ。」
小父さんは海を見ていた。
島を見ていた。
島の向こうを見ていた。
陸にも、海にも、島にも、いろいろな人が生きている。④少年には、すぐ横にいる小父さんが、なぜか遠くの人のように感じられる一瞬があった。空が晴れているからよけいにさびしいという日もある。少年は初めてそんな感情を知った。

少年が小父さんと一緒に帰って来た時、小母さんはもう泣きやんでいた。それでも、母親にやさしい言葉をかけられる度に、着物の袖口を目もとに当てた。
小父さんが、湯のみ茶碗の出されている注ちゃぶ台の前に座ると、小母さんが、母親から預かっていた白い封筒を渡した。小父さんは、その封筒を受け取り、黙ってb押しいただく格好をした。
「お力になれなくて、と、主人が申し訳ないがっております。」
母親が、しんみりした声で言うのを、少年はうなだれて聞いた。
「よくお礼を言って下さい。ありがとうございます。⑤いずれ。」
小父さんは、深々と頭を下げた。

掘り炬燵に今年初めての炭火が入った。

少年が、母親と手伝いの女との夕食を終えて、父親の食器だけが残されている食卓の傍らの炬燵で、小学生新聞をひろげていると、母親が、編み棒をつけたままの、出来かけの肩当てと毛糸の玉を持って炬燵の前に座った。

「さっき、お父さんからの電話で分かったんだけれど、中通りの小母さん、入院らしいの。」

母親はそう言ってから、

「少し日を待って、お見舞いに行きましょう。」

とひとりごとのように呟いた。

「きっと疲れが出たんでしょう。」

何も尋ねないのに、そうも呟いた。

少年は言われたことを、そうと聞くほかなかった。容易に尋ねさせない雰囲気も母親に、あった。

何があろうとそこだけは春のようであったあの晩秋の神社の石段で、入り江の向こうの内海の島々を見ながら、外海のはるか彼方の大連を、いやもっと遠くの何かを見ながら僕に話してくれた小父さんは、あの時でさえ、目に見えないとても大きなものと力くらべをしていると思ったのに、今度は小母さんまで病気になって……よりにもよって、どうして小父さんがこんな目に遭わなければならないのか。

もしも、手伝いの女からそっと聞かされたばかりの噂どおり、小父さんが人を助けるために押したハンコ一つが災いのもとだとすればあまりにもひど過ぎる。

小父さんたちの生活をこんなに変えてしまった得体の知れないものと、自分も、いつかは、力くらべをしなければならない日がくるかもしれないという自覚が、⑥少年に「人生」を予感させた。

注　大連＝中国の都市。第二次世界大戦中は、事実上日本が統治していた。
ちゃぶ台＝和室で食事をするときなどに使用する台。折りたたみのできる短い脚がついている。

問一　――線㋐・㋑のカタカナを漢字に直しなさい。

問二　――線a「いっときして」・b「押しいただく格好」の意味として適当なものを、それぞれ次から選び、記号で答えなさい。

a
ア　一休みして
イ　しばらくして
ウ　一服して
エ　すぐに
オ　一時間たって

b
ア　ていねいに頭を下げているようす
イ　自分の胸に抱きしめているようす
ウ　いったん押し返そうとするようす
エ　額をちゃぶ台に押しつけるようす
オ　うやうやしく上に掲げるようす

問三　――線①「人間社会と同じで、向こうからかかってくれるやさしい魚がいっぱいいる」とありますが、この言葉は小父さんの経験に基づくものです。それが書かれている一文を文中から抜き出し、初めの五字を書きなさい。

問四　――線②「小春日」とは、どのような日ですか。文中の語句を用いて、十字以内で書きなさい。

問五　――線③「少年は耐えがたくなって」とありますが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　小父さんへのさまざまな思いがあふれ出てきたから。
イ　小父さんはやはり負け犬だと思い、悲しかったから。
ウ　小父さんはあまりに自分のことを話さないから。
エ　小父さんが困っているなら言ってほしいと思ったから。
オ　小父さんに自分へのもっと強い言葉を期待したから。

問六　――線④「少年には、すぐ横にいる小父さんが、なぜか遠くの人のように感じられる一瞬があった」とありますが、そのように感じた要因として最も適当な部分を、「こと」に続く形で、文中から三十字以内で抜き出しなさい。

問七　――線⑤「いずれ」の下に省略されている言葉を、十字以内で答えなさい。

問八　――線⑥の『人生』とは、どのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　何が起こるか常にわからないもの。
イ　人に苦痛や不幸をもたらすもの。
ウ　夢の実現に向かって努力するもの。
エ　人にいろいろな試練を与えるもの。
オ　細心の注意を必要とするもの。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

> 昔、インドで、親から銭五十貫を渡され、宝を買いに行った子がいた。途中、舟から亀が首を出しているのを見て、尋ねたところ、舟に乗っていた人が「殺して大事なことに使う」と言ったので、五十貫を支払い、亀を逃がした。

心に思ふやう、親の、宝買ひに隣の国くやりつる銭を、①亀にかくてやみぬれば、親、（どいかに腹立ち給はんずらん。さりとて、また、親のもとへ行かで（帰らないわけにはいかないので）ありさまにあらねば、親のもとへ（なに腹をおたてになるだろう）帰り行くに、道に人のあひて言ふやう、「ここに亀売りつる人は、この下の渡りにて、舟うち返して死ぬ」と語るを聞きて、親の家に帰り行きて、銭は亀にかへつるよし語らんと思ふほどに、親の言ふやう、「②何とてこの銭をば、返しおこせたるぞ」と問へば、子の言ふ、「さることなし（そんなこと）。その銭にては、しかじか亀にかへてゆるしつれば、③そのよしを申さんとて参りつるなり」と言へば、親の言ふやう、「④黒き衣きたる人、おなじやうなるが五人、おのおの［　　］貫づつもちてきたりつる。これ、そなる（これが、それだ）」とて見せければ、⑤この銭いまだぬれながらあり。

問一　――線①「亀にかくてやみぬれば」とはどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　亀にかえて病気になってしまったので　　イ　亀にかえて申し訳ないと思ったので
ウ　亀にかえてお使いができなくなったので　　エ　亀にかえて気がすんだので
オ　亀にかえて問題が解決したので

問二　――線②「何とてこの銭をば、返しおこせたるぞ」とはどういう意味ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　ぜひこの銭を返さねばならないのだ。　　イ　誰にこの銭を返さなければならないのだ。
ウ　どこへ行くためにこの銭を返すのだ。　　エ　何をしてこの銭がここに返されたのだ。
オ　どうしてこの銭を返してよこしたのだ。

問三　――線③「そのよし」と同じ内容を指す部分を、文中から十字以内で抜き出しなさい。

問四　――線④「黒き衣きたる人」とは、何ですか。一語で書きなさい。

問五　［　　］に入る漢字一字を書きなさい。

問六　――線⑤「この銭いまだぬれながらあり」とありますが、なぜ「ぬれ」ていたのですか。十五字以内で書きなさい。